

「日本語表現」再履修生の学習スキルに関する自己評価

—初年次履修生との比較—

辻本 桜子

Tsujimoto Sakurako

1. はじめに

愛知淑徳大学では、初年次の前期中、「日本語表現 1」という科目が開講されている。この科目は大学での学修に必要なライティングスキル修得を目的とした科目であり、全学部、全学科、全専攻の1年生の必修科目となっている。

ここで2022年度の「日本語表現 1」のシラバスの概略を述べると、第1回目の授業はオリエンテーションで、第2回目から第4回目で学術的文章執筆時に必要な文章表現や文法について学修する。そして5回目から7回目で1本、8回目から10回目で1本、11回目から13回目で1本の小論文の執筆準備をさせ、合計3本の小論文を提出させる。

そして、この科目は必修科目であるがゆえ、出席回数が3分の2未満の者、成績評価の合計点が100点中59点以下であった者のために再履修クラス^{注1}が開講されている。再履修クラスで使用されるテキストは初年次生のための「日本語表現 1」と同様のもので、シラバス、評価方法も初年次生と同様である。異なる点は、主に以下の3点である。1. 再履修生のほぼ全員がこの科目の受講経験があることから、授業中、担当者による説明時間を短縮している点、2. 学年、学科、専攻の異なる受講生とのグループ学習が苦手な学生がいるため、初年次開講クラスでは必ず取り入れているグループ学習の時間をなくす、または短縮している点、3. (1と2の理由に加えて) 自宅学習が困難な者があるため、授業中に必ず課題に取り組む時間を設けている点である。それらの点を除いては、初年次開講「日本語表現 1」と同様の授業展開を行っている。

ところで、同科目を繰り返し受講する者がいる再履修クラスの単位取得率はどれくらいのものか。参考に、筆者が担当した2022年度前期の再履修クラスについて述べると、科目登録者は25名がいたが、そのうち単位取得者は8名で、単位修得率はわずか32.0%であった。しかし、単位修得率は高くないものの、筆者の実感として、学期末まで出席し単位取得を果たす学生の中に、学期中、徐々に日本語力を向上させ、洗練された課題を提出する者がいた。これは、何度も同じ説明を聞き、類似の課題を繰り返すためか。なお、2022年度の本科目の受講生の

平均受講回数は2.3回であった。

そこで、次のような仮説を立ててみた。再履修生は受講開始直後、日本語学習に自信がなさそうに見えるが、最後までやり遂げた者の中に、受講後、「学習スキル」に関する自己評価が向上する者がいるのではないか。このような希望的仮説を立て、調査を実施し、検証することにした。再履修生に対して調査を行い、もし筆者の予想通り自己評価が向上した項目があれば、その項目につき、「日本語表現 1」の再履修クラスを受講した意義があると言える。しかし、もし、受講後にも自己評価が低い項目が明らかになれば、今後の授業時に特に注力するよう参考になりたい。

2. 調査

調査は2022年7月の前期授業最終日(授業第15週目)に実施した。調査方法はwebアンケート形式であった。愛知淑徳大学では、同時期に筆者を含む本科目の担当教員が全学の初年次生に対し、授業アンケートを行っている。そのアンケートはこれまで再履修クラスでは実施されることがなかったが、結果の比較をするため、本研究では全学の初年次生に行っているものと同様の調査項目について調査を行った。ただし、紙片の都合上、本稿では、調査項目のうち「学習スキル」に関する回答についてのみ報告する。

2.1 調査対象者

再履修クラスの調査対象者^{注2}は、2022年7月の前期授業最終日に出席した、2年次生から4年次生までの9名であった。調査対象者の属性は、全員日本語母語話者で、性別は9名中男性7名、女性2名であった。学年は2年次生が6名、3年次生が2名、4年次生が1名であった。本科目の平均受講回数は2.3回で、最少は2年次生の2回目で、最多は4年次生の7回目であった。

初年次生については、2022年7月の同時期に全学生に対し授業アンケートを行い、1,832名の学生から回答を得たが、本稿では、そのうち筆者の担当する3クラス72名分の回答を取り上げることにした。言うまでもなく、彼らは全員大学1年次生で、本科目の初回受講生であった。全員日本語母語話者。なお、3クラスの合計受講者

数は77名であったが、調査日に欠席した者、またスマートフォンに不具合がありwebアンケートが実施できなかった者がおり、回答者は72名で、有効回答率は93.5%であった。初年次生に対するアンケートは匿名で行ったため、未実施者5名がどの学生であったか手元に資料がない。そのため、性別については受講者名簿をもとに77名の内訳について述べる。内訳は男性29名、女性48名であった。参考にされたい。

2.2 調査項目

本稿では、調査項目のうち「学習スキルの定着」と、「学習スキルの活用」に関する回答のみ述べる。「学習スキルの定着」に関する質問は、以下の9問からなる。それぞれ受講前後の自己評価を「十分できる」から「全くできない」までの6件法で尋ねた。

- 問 1. 文章作成前に、アイデアを広げたり深めたりすること
 問 2. 自説の主張に導く文章展開（アウトライン）を考えること
 問 3. 自説の主張に適した根拠を探し提示すること
 問 4. 事実と意見（分析や主張）を分けて考えること
 問 5. パラグラフの役割を生かして文章を書くこと
 問 6. 意味の通りやすい簡潔な文を工夫すること
 問 7. 学術的文章に適した言葉や文体を工夫すること
 問 8. 常用漢字を正しく読み、書くこと
 問 9. グループ活動で積極的に意見交換し、発展的な結論に導くこと

「学習スキルの活用」に関する質問は、以下の2問からなる。問10については、「とてもよく生かした」から「全く生かさなかつた」までの6件法で尋ねた。問11については、「とてもよく生かすと思う」から「全く生かさなかつたと思う」までの6件法で尋ねた。

- 問 10. この授業で学んだスキルをこの授業以外の場面で生かしたか
 問 11. この授業で学んだスキルを今後の学習活動や社会生活で生かすと思うか

3. 調査対象者の成績評価

ここで調査結果について述べる前に、調査対象者の成績評価の内訳について述べておく。

表1は再履修クラスの受講生全員と回答者9名の成績評価の内訳を示したものである。表1に示したように、回答者9名の成績評価の内訳は、「A+」が2名、「A」が2名、「B」が1名、「C」が3名、「F（不合格）」が1名であった。単位取得率は32.0%であったが、取得者の8名を

含む9名が授業最終日まで出席していた。そして、取得者のうち成績評価が「A」以上の者が4名と大健闘していた。特に合計90点以上を獲得しなければ取得できない「A+」の成績を収めた2名については、学期中、継続して努力していたことが印象に残っている。

表1 再履修生全員と回答者の成績評価の内訳

	A+	A	B	C	F	失格
全員 (n=25)	2	2	1	3	1	16
回答者 (n=9)	2	2	1	3	1	0

次に、初年次生クラスの成績評価の内訳を表2に示す。前述のとおり、調査の回答者が特定できないため、ここでは参考に受講生77名の成績評価の内訳を示す。「A+」取得者はいなかったが、「失格」者もおらず、もっとも多かったのは「B」取得者の32名であった。単位取得率は98.7%と高確率であった。

表2 初年次生全員の成績評価の内訳

	A+	A	B	C	F	失格
全員 (n=77)	0	18	32	26	1	0

4. 調査結果

本章ではアンケートの調査結果について、再履修生の回答と初年次生の回答を比較しながら述べる。再履修生の結果は、発表者が集計しまとめたものを使用する。初年次生の結果は、筆者も調査実施者の一人であったが、松本（2022）^{注3}がまとめた集計結果を参照する。

4.1 「学習スキルの定着」について

まず、受講前後の「学習スキルの定着」の自己評価について述べる。問1から9まで「十分できる」を「6」、「全くできない」を「1」として得点化し、平均値と標準偏差を算出した。結果を表3に示す。

表3 受講前後の「学習スキルの定着」の自己評価

	再履修生 (n=9)		初年次生 (n=72)	
	受講前	受講後	受講前	受講後
問1.	3.44(1.13)	4.67(1.00)	3.22(1.04)	4.31(0.76)
問2.	3.00(0.87)	4.56(1.24)	3.11(1.03)	4.32(0.69)
問3.	2.89(1.17)	4.67(1.22)	3.07(0.97)	4.33(0.77)
問4.	2.67(0.87)	4.44(1.42)	3.38(0.96)	4.42(0.64)
問5.	2.44(1.01)	4.33(1.00)	2.92(1.15)	4.32(0.71)
問6.	2.89(0.93)	4.56(1.24)	3.29(1.01)	4.19(0.80)
問7.	2.67(0.87)	4.56(1.24)	3.04(1.04)	4.26(0.69)
問8.	3.89(1.27)	4.89(0.93)	3.83(0.99)	4.47(0.92)
問9.	3.44(1.01)	4.67(1.00)	3.65(1.28)	4.51(1.06)

表3に示したとおり、再履修生の受講前のそれぞれのスキルの平均値は、問1. (アイデア) 3.44、問2. (アウトライン) 3.00、問3. (根拠) 2.89、問4. (事実と意見) 2.67、問5. (パラグラフ) 2.44、問6. (簡潔な文) 2.89、問7. (学術的な言葉・文体) 2.67、問8. (常用漢字) 3.89、問9. (グループ活動) 3.44であった。

初年次生の平均値は、問1. (アイデア) 3.22、問2. (アウトライン) 3.11、問3. (根拠) 3.07、問4. (事実と意見) 3.38、問5. (パラグラフ) 2.92、問6. (簡潔な文) 3.29、問7. (学術的な言葉・文体) 3.04、問8. (常用漢字) 3.83、問9. (グループ活動) 3.65であった。つまり、受講前の再履修生の自己評価は、9項目中、「アイデア」と「常用漢字」の2項目を除く「パラグラフ」など7項目で初年次生よりも低かった。

一方で受講後の結果について述べると、再履修生の平均値は、問1. (アイデア) 4.67、問2. (アウトライン) 4.56、問3. (根拠) 4.67、問4. (事実と意見) 4.44、問5. (パラグラフ) 4.33、問6. (簡潔な文) 4.56、問7. (学術的な言葉・文体) 4.56、問8. (常用漢字) 4.89、問9. (グループ活動) 4.67であった。

初年次生の平均値は、問1. (アイデア) 4.31、問2. (アウトライン) 4.32、問3. (根拠) 4.33、問4. (事実と意見) 4.42、問5. (パラグラフ) 4.32、問6. (簡潔な文) 4.19、問7. (学術的な言葉・文体) 4.26、問8. (常用漢字) 4.47、問9. (グループ活動) 4.51であった。

再履修生も初年次生も、すべての項目において受講後に自己評価が向上していた。その上で、再履修生の受講後の自己評価はすべての項目において初年次生の平均値を上回っていた。特に授業中、全6回の小テストを実施した「常用漢字の読み書き」は自信をつけたようで、9項目中、平均値がもっとも高く、そして受講生全員が「まあまあできる」＝「4」以上の肯定的評価をしていた。この漢字の小テストについては、授業中にテスト勉強の時間を設けることのない自習課題であった。テスト範囲、難易度は初年次生と同様であったが、問題は異なるものであった。実は授業中実施した初年次生の小テストの平均点は5点満点中3.9点で、再履修生については3.7点と、初年次生をわずかに下回っていた。だが、大事なことは、この科目の小テストのため授業外にも学習をし、それに対する自己評価が高かった再履修生がいたということである。つまり「漢字の読み書き」に自信を持って「日本語表現」の再履修クラスを終えた学生がいたのである。

4.2 「学習スキルの活用」について

次に、「学習スキルの活用」の結果を述べる。問10に

ついては本授業で学んだスキルを授業以外の場面で「とてもよく生かした」を「6」、「全く生かさなかった」を「1」として得点化し、平均値と標準偏差を算出した。問11については本授業で学んだスキルを今後「とてもよく生かすと思う」を「6」、「全く生かさないとと思う」を「1」として得点化し、平均値と標準偏差を算出した。表4はこの2問の結果を示したものである。

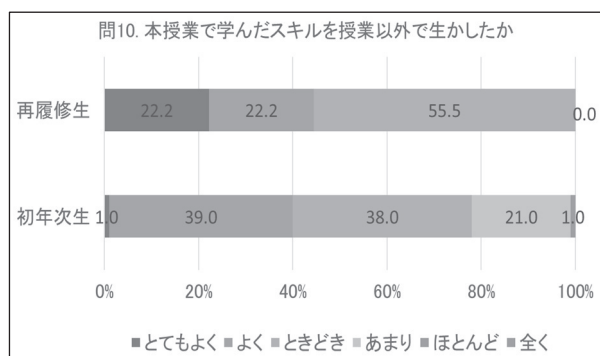
表4 受講後の「学習スキルの活用」の自己評価

	再履修生 (n=9)	初年次生 (n=72)
問10.	4.67(0.87)	4.17(0.87)
問11.	5.22(0.67)	5.15(0.88)

表4に示したとおり、再履修生の問10「この授業で学んだスキルを授業以外で生かしたか」に対する回答の平均値は4.67で、初年次生の4.17よりも高かった。

表5は回答の割合を詳細に示したものであるが、これを見ると「とてもよく生かした」という学生が、再履修生には22.2%いたが、初年次生には1.0%しかいなかったことが分かる。また、初年次生には「あまり生かさなかった」という否定的回答者が21.0%いたが、再履修生については0%、つまり皆無であったことが分かる。さらに、初年次生には「全く生かさなかった」という者も1.0%いたが、再履修生には「あまり / ほとんど / 全く生かさなかった」という否定的回答者はおらず、全員が修得したスキルを授業以外の場面で「生かした」と回答していたことが分かる。

表5 授業以外の「学習スキルの活用」の自己評価



さらに本授業で修得したスキルを「どのような場面で生かしたか」自由記述で回答を求めた。表6は主な回答をまとめたものである。

表6 授業以外の「学習スキルの活用」の場面例

- <他の授業の課題で>
- ・心理学実験1aのレポート作成時
 - ・文化人類学や、ヴィジュアルメディアなどの最終課題
 - ・基礎講読の授業の問題を読み解く際

<他の授業の試験で>

- ・ai 入門の最終試験の記述欄
- ・データサイエンス1の最終試験の記述欄

<アルバイトで>

- ・アルバイトで目上の方とお話する際

<趣味で>

- ・趣味の範囲や感想など文章を書く時

<他者への支援で>

- ・弟の大学入試の小論文を教える時

表6に記載したとおり、「他の授業の課題」での活用場面を挙げる者が多かった。そして、授業以外にも、アルバイト先や趣味などで広範囲に活用していることが分かった。

次に問11の今後の「学習スキルの活用」について尋ねた結果について述べる。結果は前ページの表4に示したとおり、再履修生の平均値は5.22で初年次生の5.15よりも高いことが分かった。回答の割合の詳細を表7に示す。

表7 今後の「学習スキルの活用」の自己評価

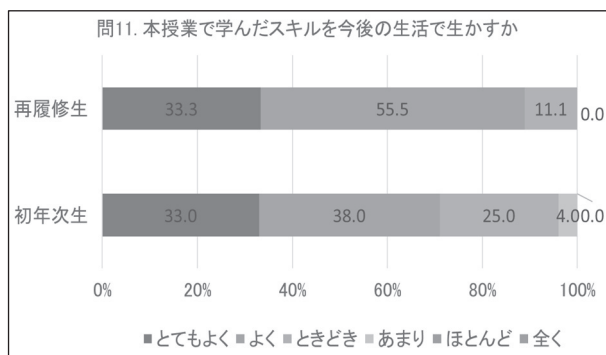


表7に示したとおり、再履修生も初年次生も、本授業で学んだスキルを今後「生かす」という学生が多かった。「とてもよく生かす」と回答した学生は再履修生が33.3%、初年次生も33.0%おり、「よく生かす」と回答した再履修生は55.5%、初年次生は38.0%いた。特に再履修生は「とてもよく / よく生かす」と回答した学生が合計88.8%と約9割を占めていた。さらに、初年次生には「あまり生かさなない」という学生が4.0%いた一方で、「あまり / ほとんど / 全く生かさなない」という否定的な回答をした再履修生はいなかった。全員が今後、本授業で学んだスキルを「生かす」という肯定的回答をしていた。これは特筆すべき点である。本科目の履修を繰り返すうちに修得したスキルの重要性に気づいたのだろうか。そうであれば、学生は再履修をした意義があると言える。

さらに「どのような場面で生かすか」自由記述で回答を求めたところ、今後の活用場面についても、「他の授業の課題」を挙げる者が多かったが、その他に趣味や手紙

を書くときについても言及する者がいた。なお、2名、大学生生活の学びの集大成と言える「卒業論文を書く時」を挙げている者がいた。本授業で学んだスキルを卒業論文執筆時にも活用してもらえたら担当者としては嬉しい限りである。

5. まとめ

本研究の調査結果から、「日本語表現」受講前の再履修生の「学習スキル」の自己評価は9項目中、「アウトライン」「パラグラフ」など7項目で初年次生よりも低いことが分かった。しかし、受講後には、すべてのスキルで高まっており、そして、すべてのスキルにおいて平均値が初年次生を上回っていることが分かった。授業で身につけた「学習スキル」の現在、今後の活用についても、初年次生よりも平均値が高かった。そして、全員が修得したスキルを「今後も生かす」と回答していた。

再履修クラスの単位取得率は決して高いものではないが、本研究の結果から受講後に「学習スキル」の自己評価が向上する学生がいることが分かった。今後、本研究の結果を指導に生かしていきたい。

注

- 1 授業担当者内で当該クラスは「単位未修得クラス」と呼ばれており、再履修生だけではなく、編入生や休学者等、2年次生以上で初年次に「日本語表現1」を履修していない者が含まれることがある（ただし、含まれる場合もごくわずかである）。
- 2 再履修生も初年次生も、調査対象者には、本調査について説明を行い、結果の研究利用の許諾を得ている。特に再履修生については、調査前に口頭と書面にて丁寧に説明をし、同意を得て実施した。
- 3 参照資料は、松本明日香(2022)「「日本語表現1」をふりかえって」というタイトルの2022年9月13日に開催された「日本語表現1・2」担当者会議資料のpp.1-2である。

参考文献

- (1) 松本明日香(2023)「「日本語表現1」「日本語表現2」受講アンケート集計結果」『愛知淑徳大学初年次教育研究年報』第8号, pp.36-38.

付記

本稿は日本リメディアル教育学会第18回全国大会(2023年8月23日、江戸川大学)において「「日本語表現」再履修生の学習スキルに関する調査結果—初年次履修生との比較—」と題し行った発表内容に、加筆・修正をしたものである。